

社会技術研究開発事業  
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム  
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」  
「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・  
孤独の一次予防」

伊藤 文人  
東北大学 大学院教育学研究科 講師

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名 .....	2
2. 研究開発実施の具体的内容 .....	2
2-1. 研究開発目標 .....	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン .....	2
2-3. ロジックモデル .....	3
2-4. 実施内容・結果 .....	4
2-5. 会議等の活動 .....	8
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....	10
4. 研究開発実施体制 .....	10
5. 研究開発実施者 .....	12
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など .....	17
6-1. シンポジウム等 .....	17
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	17
6-3. 論文発表 .....	18
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	19
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等 .....	20
6-6. 知財出願 .....	21

## 1. 研究開発プロジェクト名

シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防

## 2. 研究開発実施の具体的内容

### 2-1. 研究開発目標

本プロジェクトで達成を目指す目標はシチズンサポートプロジェクトの実施(目標1)および可視化ツールの社会実装(目標2)である。研究開発要素①～③が有機的につながることで、これらの目標を達成することが可能となる(図1)。それぞれの目標の概要は以下のとおりである。

#### 目標1：シチズンサポートプロジェクトの実施(研究開発要素①、③)

コミュニティ・シェッド(以下、CS)が高齢男性の低い社会参加率を改善するか、社会的孤立・孤独の一次予防システムとして有効に機能するか、健康面にも好影響を与えるか、フィールド調査および心理・脳・健康調査から検証する。スモールスタート期間から目標1'としてフィールド調査および心理・脳・健康調査を実施し、CSの効果検証の基礎となる知見を得る。

#### 目標2：可視化ツールの社会実装(研究開発要素②、③)

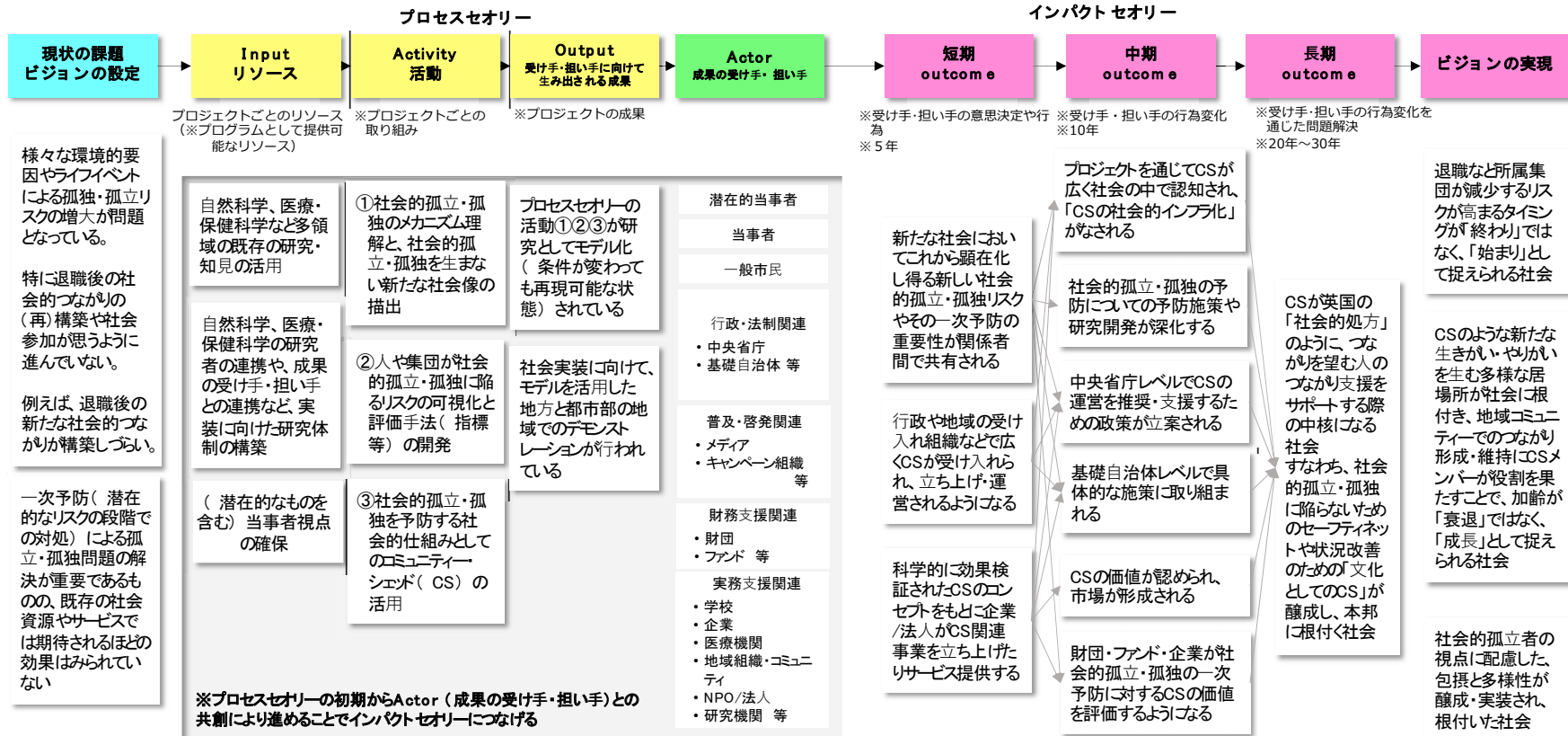
このツールは目標2'としてスモールスタート期間から開発を開始する。社会実装に際しては、地域の作業療法士や保健師等の支援者が実施・評価のサポートを行うことを想定している。これにより、高リスクと判定された人が既存のサービスを受けているかどうか確認したり、評価結果に基づいて適切なサービスを提供することが容易になる。加えて、地域診断として、その地域の社会的ネットワークにどのような課題があるのかを把握し、ポピュレーションアプローチを検討するためにも活用可能である。

### 2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. CSは社会的孤立・孤独の一次予防に有効であるか?
- Q2. 孤立リスク可視化ツールは有効に機能するか?
- Q3. CS実施地域における孤立・孤独の構造とは?

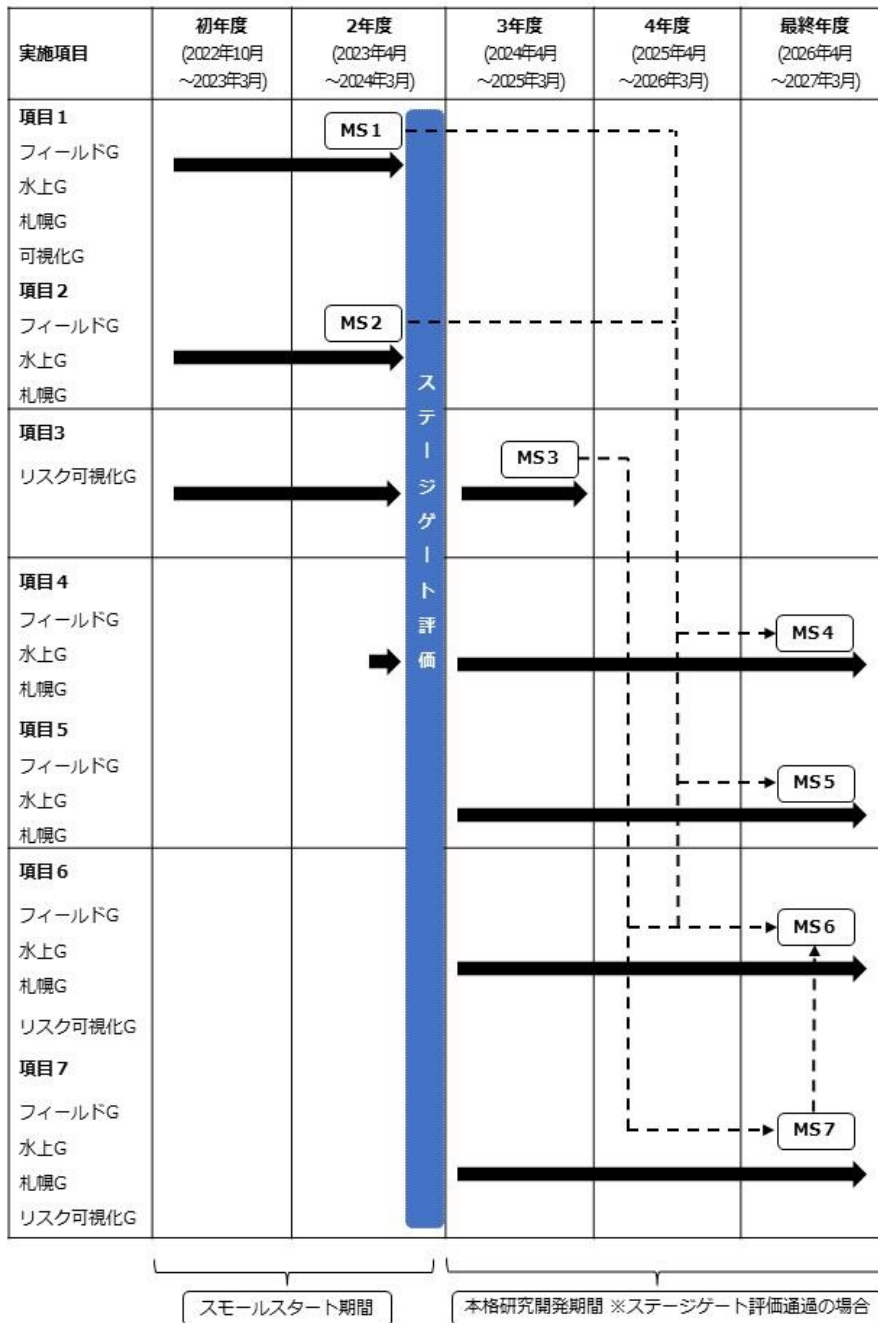
### 2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)  
「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」ロジックモデル



## 2-4. 実施内容・結果

### (1) スケジュール



#### マイルストーン (MS)

- MS 1 : 質的/量的混合アプローチによるデータ取得
- MS 2 : CSの継続運営に関わる要因の検討
- MS 3 : 孤立リスク可視化ツールの開発
- MS 4 : 水上村CSの立ち上げ・運営
- ステージゲート評価-----
- MS 5 : 札幌市CSの立ち上げ・運営
- MS 6 : CSの効果検証
- MS 7 : 孤立リスク可視化ツールの社会実装

## (2) 各実施内容

### 実施項目①-1：質的/量的混合アプローチによるデータ取得

インタビュー調査（質的研究）、oSIMを活用した社会的アイデンティティの定量化・可視化（量的研究）、心身の健康などに関する質問紙調査（量的研究）、運動機能に係る調査（量的研究）、脳機能画像計測（量的研究）による効果検証のデータ取得を熊本県水上村および札幌市西区にて継続した。また、東北メディカルメガバンク機構・UK Biobank・Human Connectome Projectの大規模MRIデータを活用した孤独・孤立のメカニズム調査を継続している。

### 実施項目①-2：CSの継続運営に関わる要因の検討

【項目1】日本語版のツールキット（『日本のコミュニティー・シェッド 2024年度版』）を基に、2025年度版の改訂準備を進めている。

【項目2】世界各地にあるメンズシェッドが1) どのような活動を、2) どの程度の頻度で、3) どのように収入を得ながら、実施しているかに関する情報を収集するための方策について模索している。

### 実施項目①-3：孤立リスク可視化ツールの構築

2020年にオーストラリアの研究グループによって開発されたオンライン社会的アイデンティティマッピング（oSIM）をベースに、このツールの英語表記部分を日本語化するツールの限定公開を行った。

### 実施項目①-4：水上村CSの立ち上げ・運営

2023年11月30日に立ち上がった「寄郎屋」は継続的に活動を続けている。

### 実施項目①-5：札幌CSの立ち上げ・運営

2024年4月20日に「ポッケコタン」の発足会が開催され、40名を超えるメンバーが集まった。その後、札幌市西区に基地が誕生し、この基地をリノベーションするなどの活動や菜園・メンズシェフ・釣り・ゴルフ・音楽・ウォーキングなど多様な活動が行われている。  
ポッケコタンHP: <https://pokke-kotan.jimdosite.com/>

## (3) 成果

### 実施項目①-1：質的/量的混合アプローチによるデータ取得

多様なデータ取得を熊本県水上村および札幌市西区にて継続した。合計で100名を超える高齢男性のデータを蓄積することができている。大規模MRIデータを活用した孤独・孤立のメカニズム調査において、東北メディカルメガバンク機構・UK Biobankについてはすでに利用を開始しており、Human Connectome Projectについては、学内産学連携機構とやり取りしながら、利用申請に向けて準備を進めている段階である（全学の責任者を設定する必要があり、時間を要した）。3か国のデータベースを活用し孤独・孤立の脳メカニズムを検討する研究は世界初であり、インパクトが大きいと予想される。

### 実施項目①-2：CSの継続運営に関わる要因の検討

【項目1】日本語版のツールキット2025年度版では、日本のコミュニティー・シェッドの

状況や日本でのシェッド運営に関わる助言などを新たに盛り込む予定である。

【項目2】シェッド研究の世界的第一人者であるオーストラリアのBarry Golding 栄誉教授やイギリスメンズ・シェッド協会・ウェールズ協会の担当者らと意見交換を行ったところ、オンラインでの調査は極めて困難であるとの認識を示された。むしろ、直接シェッドを訪問し、その場でインタビュー調査を行うか、もしくはオンラインでシェッド管理者とのミーティングを設定する形を進められており、オンラインミーティングに向けた調整を行っている。第一歩として、オーストラリアブリスベンのシェッドを訪問し、インタビューを行った。これまでの各国でのシェッド訪問で大まかな継続運営に資する要因の洗い出しは済んでいるが、さらに精緻な情報を得られるよう、今年度も継続して各国との協力関係を築いていく。また、英国シェッド協会CEO (Charlie Bethel氏)、ノッティンガムトレント大学のClifford Stevenson氏・Niamh McNamara氏、クィーンズランド大学のAlex Haslam氏・Catherine Haslam氏、オーストラリアのBarry Golding氏らと意見交換し、シェッドやシェッドのメンバーへの配慮を十分にした形でのデータ取得の在り方について議論を行った。

#### 実施項目①-3：孤立リスク可視化ツールの構築

現在、oSIMの日本人での妥当性検証を行った論文が印刷中 (in press) であり、論文が一般公開されてから日本語化ツールを一般公開することを予定している。なお、解析対象としたデータや解析コードについては、Open Science Frameworkにて匿名化処理後に公開を行っている (データマネジメントプラン記載済み)。

#### 実施項目①-4：水上村CSの立ち上げ

2023年11月30日の立ち上げ以来、活動自体には参加しないがシェッドに足を運ぶ女性たちも増え、真の意味での「コミュニティ・シェッド」が形成されつつある。主となる活動として竹炭作りやソバ作りを軸に、環境整備活動、村や地域主催のイベントや行事への参加、教育委員会からの依頼による小学生を対象とした昔遊び指導など、村内においても重要なコミュニティの一つと認識されるようになり、活動の幅は広がった。2024年11月28日には総会が開催され、村長の中嶽村長様をはじめ山崎村議会副議長様、各関係課の課長様などのステイクホルダーを交えた意見交換がなされた。継続運営に向け、シェッドのある建物を村が買い取り、委託管理者として契約することでコミュニティ・シェッドの活動を優先して実施できる様な配慮もして頂けることとなっている。また、竹炭販売で得た資金やシェッド周りの環境整備 (草刈りや花壇作りなど) を村から委託して頂き委託金を活動資金に充てるなど、継続運営に向けた努力をしてくださっている。7名の参加メンバーで発足し、その後に退会者は1名も無く、現在は16名で活動されている。また、2025年3月27日、村内で新しくCSを立ち上げるため説明会を実施し計11名の方が参加を希望しており、同じ村内ではあるが横展開についても着実に進んでいる。シェッド活動の場所は休校となった小学校の1室をシェッドとして使ってほしいという村役場からの要望もあり場所の確保は出来ている。

#### 実施項目①-5：札幌CSの立ち上げ

2024年4月20日に「ポケコタン」の発足会が開催されて以来、菜園・メンズシェフ・釣り・ゴルフ・音楽・ウォーキングなど多様な活動が行われている。また、内閣府の助成金

を新たに獲得し、自力での運営継続を進めている。41名で発足後、健康問題や家族の介護、仕事の忙しさ等の理由で7名が退会したが、9名が新たに入会し、運営体制の組織化も行われている。

ポッケコタンHP: <https://pokke-kotan.jimdosite.com/>

[当該年度の主な予定]

令和6年4月	札幌CS「ポッケコタン」正式立ち上げ
令和6年4月	UKMSA CEOのCharlie Bethel氏と会議@大阪
令和6年5月	伊藤PJ本格研究開発期間キックオフシンポジウム@名古屋大学
令和6年6月	Clifford Stevenson教授講演会@東北大
令和6年6月	ノッティンガムトレント大にて伊藤・高島が招待講演
令和6年7月～9月	水上村CS効果検証データ取得
令和6年10月～11月	水上村CS2か所目立ち上げ
令和6年11月	アメリカ・オーストラリア シェッド訪問
令和7年1月	予算の決定額通知、計画書作成依頼、令和7年度計画書提出
令和7年3月	研究開発計画締結
令和7年2月～3月	札幌CS効果検証データ取得

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. CSは社会的孤立・孤独の一次予防に有効であるか？

回答

現在、質・量の側面からデータ取得を実施し、効果検証を進めています。オーストラリアなど諸外国ではすでに効果が広く認められており、全世界で3,000以上のシェッドが運営されていると言われております。熊本県水上村や北海道札幌市においても、地域の高齢者から良い反応をいただいております。検証結果は次年度から出始めるとは思いますが、CSは社会的孤立・孤独の一次予防に貢献しようと考えています。

Q2. 孤立リスク可視化ツールは有効に機能するか？

回答

孤立リスク可視化ツールは日本人の孤立・孤独を有意に予測するという結果が得られ、論文が国際誌に受理されました。今後、正式公開されましたら、それに合わせて日本語化ツール等を公開したいと考えています。

Q3. CS実施地域における孤立・孤独の構造とは？

回答

水上村での質的調査により、たとえ村内に居住していても、村外で働く住民が増える中で、新たな価値観が地域に流入し、従来重視されてきた活動や人付き合いのスタイルが軽視されていると感じる高齢者が存在することが示されました。こうした変化により、疎外感や寂しさを抱える人々が生じており、地域固有の価値観や文化を再確認できる場が、孤立・孤独の予防に資する可能性が示唆されました。

一方、札幌市での質的調査からは、退職期から高齢期にかけての「二層構造的な孤立・

孤独」が浮かび上がりました。第一に、退職を契機に、それまで仕事に付随していた人間関係が表面化し、対処に困難を感じることで、他者との関係を傍観するような態度を取るようになり、結果として孤立・孤独に陥るケースが見られました（＝人付き合いの前景化）。第二に、本人や周囲の人々の高齢化に伴う身体的・認知的な機能低下や行動範囲の縮小によって、意図せず社会的つながりを失い、その再構築が困難になる状況が示されました。これらの結果から、活動を媒介とし、人付き合いを背景化できるような場の構築が、かつての職場的関係性に近い形でのつながりを支え、孤立・孤独の予防に有効である可能性が示されました。

#### (5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

水上村のシェッドは、2025年度から2か所となるため、支援者側のマンパワー不足が懸念される。よって、水上村役場の協力を得て2つのシェッド間で情報を交換し合う場として「水上村コミュニティー・シェッド運営委員会」を新たに設置し、2つのシェッド間で協力できる体制を整える必要がある。札幌市のシェッドでは、会員数が増えるなかで持続可能な運営体制を整備していくことが課題である。

### 2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024年4月2日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年4月4日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2024年4月18日	UKメンズシェッド協会CEOとの打ち合わせ	大阪	Charlie Bethel氏の来日に合わせて打ち合わせを行った。
2024年4月25日	第4回PJ内全体会議	オンライン	PJ内全体で進捗報告等を実施
2024年5月7日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年5月9日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2024年5月14日	第8回CS講演会	オンライン	第8回CS講演会をPJ内で実施
2024年5月20日	第9回CS講演会	オンライン	第9回CS講演会をPJ内で実施
2024年6月4日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年6月11日	第1回国際セミナー	ハイブリッド	Nottingham Trent UniversityのClifford Stevenson教授の講演

2024年6月14日	第1回ICCLP国際シンポジウム	ハイブリッド	Nottingham Trent UniversityのClifford Stevenson教授ら、英豪のメンバーらと日本側でInternational Centre for Community-Based Loneliness Prevention (ICCLP)の立ち上げを記念したシンポジウムを Nottingham にて開催
2024年7月2日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年7月4日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2024年8月6日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年8月6日	第10回CS講演会	オンライン	第10回CS講演会をPJ内で実施
2024年9月3日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年9月5日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2024年9月7日	日本心理学会第88回大会 公募シンポジウム	対面	「孤独・孤立の予防に基礎研究は貢献できるのか？」開催
2024年9月17日	第11回CS講演会	オンライン	第11回CS講演会をPJ内で実施
2024年10月1日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年10月17日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2024年10月29日	第12回CS講演会	オンライン	第11回CS講演会をPJ内で実施
2024年11月4日	国際共同シンポジウム「多様性と孤独・孤立：作業療法と作業科学による公正の追求」	ハイブリッド	International Symposium “Loneliness, Isolation, and Diversity: Pursuing Justice through Occupational Therapy and Occupational Science”
2024年11月5日	第2回国際セミナー	ハイブリッド	講師：Prof. Barry Golding 「The Basics of Men’s Sheds: Their potential to reduce social isolation & loneliness in Japan」

2024年11月12日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2024年11月19日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2024年11月28日	水上村 寄郎屋 1周年総会	対面	村長ら多様なステークホルダーが参加。
2024年12月7日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2025年1月7日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2025年1月21日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2025年2月5日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション
2025年2月12日	第5回PJ内全体会議	オンライン	PJ内全体で進捗報告等を実施
2025年2月13日	第3回国際セミナー	オンライン	講師：Dr. Bryony Porter
2025年2月25日	水上村CSミーティング	オンライン	水上村CSの活動報告等
2025年3月5日	札幌CS定例会議	オンライン	札幌CSの1カ月間の活動報告とディスカッション

### 3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

oSIMの日本人における妥当性検証が完了し (Ito et al., Japanese Psychological Research in press)、oSIMインターフェースを日本語化するChrome拡張を一般公開した。

<https://chromewebstore.google.com/detail/osim-japanese-translation/cgcnlgaaaihbgmfkklkxhcjnelbhnlpn?hl=ja>

### 4. 研究開発実施体制

#### (1) マネジメント体制

研究代表者(伊藤)が全体の統括を行う。可視化グループのマネジメントについては研究代表者(伊藤)および主たる実施者(五十嵐・日道)が担当し、フィールド支援グループのマネジメントはグループリーダー(東)、水上CSグループのマネジメントは松尾、札幌CSグループのマネジメントは高島が担当する。

#### (2) グループごとの概要

可視化グループ(伊藤 文人)

東北大学 大学院教育学研究科

実施項目： 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

グループの役割の説明： 本格研究開発期間において、質的/量的混合アプローチによるデータ取得の一部（脳・心理調査）をメインで担当することとなる。

実施項目： 可視化ツール開発

グループの役割の説明： 日本人におけるoSIMの信頼性・妥当性の検証論文を公表後、本格研究開発期間初期にonline Social Identity Mapping (oSIM) を日本語化するためのChrome拡張を一般公開する。

フィールド支援グループ（東 登志夫）

長崎大学 生命医科学域（保健学系）

実施項目： 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

グループの役割の説明： 本格研究開発期間において、質的/量的混合アプローチによるデータ取得の一部（インタビュー調査に基づく当該地域での社会的孤立・孤独・CSに対するニーズの理解、健康調査）の支援を担当することとなる。

実施項目： シチズンサポートプロジェクトの実施

グループの役割の説明： 水上村および札幌市においてCS運営支援を担当する。本格研究開発期間初期には水上村に2つ目のCSを立ち上げる予定としている。

水上CSグループ（松尾 崇史）

熊本保健科学大学 保健科学部

実施項目： 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

グループの役割の説明： 本格研究開発期間において、水上村での質的/量的混合アプローチによるデータ取得の一部（インタビュー調査に基づく当該地域での社会的孤立・孤独・CSに対するニーズの理解、健康調査）をメインで担当することとなる。

実施項目： シチズンサポートプロジェクトの実施

グループの役割の説明： 水上村においてCS運営支援を担当する。本格研究開発期間初期には水上村に2つ目のCSを立ち上げる予定としている。

札幌CSグループ（高島 理沙）

北海道大学 大学院保健科学研究院

実施項目： 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

グループの役割の説明： 本格研究開発期間において、札幌市での質的/量的混合アプローチによるデータ取得の一部（インタビュー調査に基づく当該地域での社会的孤立・孤独・CSに対するニーズの理解、健康調査）をメインで担当することとなる。

実施項目： シチズンサポートプロジェクトの実施

グループの役割の説明： 札幌市においてCS運営支援を担当する。本格研究開発期間中に札幌市内でポケコタンの“のれん分け”が起こる可能性がある。その場合、新しいCSの運営支援も行う。

## 5. 研究開発実施者

可視化グループ (リーダー氏名: 伊藤 文人)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
伊藤 文人	イトウ アヤ ヒト	東北大学	大学院教育学 研究科	講師
五十嵐 祐	イガラシ タ スク	名古屋大学	大学院教育発 達科学研究科	教授
日道 俊之	ヒミチ トシ ユキ	高知工科大学	経済・マネジ メント学群	准教授
玉井 颯一	タマイ リュ ウイチ	淑徳大学	総合福祉学部	助教
出馬 圭世	イズマ ケイ セ	高知工科大学	経済・マネジ メント学群	教授
鈴木 真介	スズキ シン スケ	一橋大学	ソーシャル・ データサイエ ンス学部・研 究科	教授
河地 庸介	カワチ ヨウ スケ	東北大学	大学院文学研 究科	准教授
青木 隆太	アオキ リュ ウタ	京都大学	大学院医学研 究科	特定准教授
澤村 大輔	サワムラ ダ イスケ	北海道大学	大学院保健科 学研究院	教授
吉田 一生	ヨシダ カズ キ	北海道大学	大学院保健科 学研究院	講師
梶村 昇吾	カジムラ シ ョウゴ	京都工芸繊維大学	情報工学・人 間科学系	准教授
麦倉 俊司	ムギクラ シ ュンジ	東北大学	東北メディカ ル・メガバン ク機構画像統 計学分野	教授
Francesca Kilpatrick	フランチェス カ キルパト リック	University College London	Circular Economy and Resource Efficiency	Lecturer
Alex Haslam	アレックス ハスラム	University of Queensland	School of Psychology	Professor

Blake McMillan	ブレイク マ クミラン	University of Queensland	School of Psychology	Industry Engagement Manager
細川 史絵	ホソカワ フ ミエ	フリー		
樋本 朱音	ハゼモト ア カネ	札幌交響楽団		
今田 大貴	イマダ ヒロ タカ	Royal Holloway, University of London	Department of Psychology	Lecturer
Catherine Haslam	キャサリン ハスラム	University of Queensland	School of Psychology	Professor
Mhairi Bowe	マイリ ボウ	Heriot-Watt University	Department of Psychology	Associate Professor
Juliet Wakefield	ジュリエット ウェイクフイ ールド	Nottingham Trent University	Department of Psychology	Senior Lecturer
Blerina Kellezi	ブレリナ ケ レジ	Nottingham Trent University	Department of Psychology	Associate Professor
Clifford Stevenson	クリフォード スティーブン ソン	Nottingham Trent University	School of Health Sciences and Social Work	Professor
Niamh McNamara	ニーフ マク マラ	Nottingham Trent University	School of Health Sciences and Social Work	Associate Professor
森 菜緒子	モリ ナオコ	秋田大学	大学院医学系 研究科	教授
豊島 彩	トヨシマ ア ヤ	島根大学	人間科学部	講師
杉浦 元亮	スギウラ モ トアキ	東北大学	加齢医学研究 所	教授
竹本 あゆみ	タケモト ア ユミ	東北大学	加齢医学研究 所	助教
Raja Timilsina	ラジャ ティ ミルシナ	アジア開発銀行研 究所	研究所	Consultant
出馬 秀実	イズマ ヒデ ミ	東北大学	大学院教育学 研究科	学術研究員

岩成 玲子	イワナリ レ イコ	東北大学	大学院教育学 研究科	技術補佐員
岩元 美由紀	イワモ ミユ キ	京都工芸繊維大学	大学院先端フ ァイプロ科学 専攻	研究員
河内 建	カワチ タツ ル	東北大学	文学研究科	D1
今川 ゆき	イマカワ ユ キ	八戸学院大学	健康医療学部	助教
Melinda Heinz	メリンダ ハ インツ	University of Northern Iowa	Department of Family, Aging & Counseling	Assistant Professor
Gabriele Bellucci	ガブリエル ベルッチ	Royal Holloway, University of London	Department of Psychology	Lecturer
Daniel Martin	ダニエル マ ーティン	Nottingham Trent University	School of Health Sciences and Social Work	D1
楠見 孝	クスミ タカ シ	京都大学	大学院教育学 研究科	教授

フィールド支援グループ (リーダー氏名: 東 登志夫)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
東 登志夫	ヒガシ トシ オ	長崎大学	生命医科学域 (保健学系)	教授
森内 剛史	モリウチ タ ケフミ	長崎大学	生命医科学域 (保健学系)	准教授
丸田 道雄	マルタ ミチ オ	長崎大学	生命医科学域 (保健学系)	助教
張 宗相	チョウ シュ ウソウ	長崎大学	大学院医歯薬 学総合研究科 医療科学専攻	D1
山園 大輝	ヤマゾノ ダ イキ	長崎大学病院	リハビリテー ション部	作業療法士
壺岐尾 優太	イキオ ユウ タ	長崎原爆病院	リハビリテー ション科	作業療法士

水上CSグループ (リーダー氏名：松尾 崇史)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
松尾 崇史	マツオ タカシ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授
爲近 岳夫	タメチカ タケオ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授
仙波 梨沙	センバ リサ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授
吉瀬 陽	キチゼ ヨウ	聖マリアヘルスケアセンター	リハビリテーション部	作業療法士
宮田 浩紀	ミヤタ ヒロノリ	熊本保健科学大学	保健科学部	講師
銚之原 将希	ホコノハラ マサキ	桜十字福岡病院	リハビリテーション部	作業療法士

札幌CSグループ (リーダー氏名：高島 理沙)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
高島 理沙	タカシマ リサ	北海道大学	大学院保健科学研究院	講師
岡田 宏基	オカダ ヒロキ	北海道大学	大学院保健科学研究院	助教
平川 諒	ヒラカワ リョウ	医療法人大和会 大内病院		作業療法士
佐伯 和子	サエキ カズコ	富山県立大学	看護学部	教授
坂上 真理	サカウエ マリ	札幌医科大学	保健医療学部	准教授
雲 杉	ユン シャン	北海道大学	大学院保健科学研究院	学術研究院
平山 理花	ヒラヤマ リカ	北海道大学	大学院保健科学院	M2
西山 雅子	ニシヤマ マサコ	フリーランス		
Kim Walder	キム ワルダ ー	Griffith University	School of Health Sciences and Social Work	Lecturer

宮島 真貴	ミヤジマ マ キ	北海道大学	大学院保健科 学研究院	講師
松寄 由利	マツザキ ユ リ	宝塚医療大学	和歌山保健医 療学部	助教
Eric Asaba	エリック ア サバ	Karolinska Institute	Department of Neurobiology , Care Sciences and Society	Senior Lecturer
Ursa Bratun	ウルサ ブラ タン	University of Ljubljana	Faculty of Health Sciences	Lecturer

## 6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2024年5月24日	一般公開シンポジウム	名古屋大学 「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」研究班	名古屋大学教育学部	30名	高齢者が新たな社会的つながりや生きがいを見つけられる居場所(コミュニティー・シェッド)を立ち上げ、その効果を作業療法学・心理学・脳科学などの観点から学際的に検証し1年6ヶ月のスマールスタート期間を経て、2024年4月より本格研究開発期間となった。本格研究開発期間の3年間で我々がどこまでコミュニティー・シェッドを日本に根づかせることができるか、コミュニティー・シェッドの効果に関わる科学的なエビデンスを提供できるのか、皆様との議論を通各代表者、参加者とともに行うキックオフシンポジウム。

### 6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

#### (1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・「日本のコミュニティー・シェッド」、伊藤文人・高島理沙・東登志夫・松尾崇史・森内剛史・丸田道雄、2024年1月

<https://drive.google.com/file/d/11fLtqyhWihszRe8yk8nmuRXIqwAoRjUo/view>

#### (2) ウェブメディアの開設・運営

- ・サイト名：国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター (JST-RISTEX) SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築) 2022年度採択「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」紹介ホームページ

URL: <https://www.ristex2022csjapan.com/>

立ち上げ年月：2022年12月

- ・ サイト名：日本コミュニティー・シェッド協会 ホームページ  
URL: <https://www.japan-community-sheds-association.com/>  
立ち上げ年月：2024年2月
- ・ SNSアカウント：@ShedsJapan  
URL: <https://x.com/ShedsJapan>  
立ち上げ年月：2022年10月
- ・ SNSアカウント：@jcsasheds  
URL: <https://x.com/jcsasheds>  
立ち上げ年月：2023年7月
- ・ Instagramアカウント：yorouya2023  
立ち上げ年月：2023年12月

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ Ayahito Ito. Community Sheds Initiative in Japan. 1st International Symposium on Social Identity and Loneliness: Community-based approaches to loneliness reduction. 2024年6月14日、ノッティンガムトレント大学
- ・ Risa Takashima. Empowering Retirees: The Story of a Men's Shed in Japan. 1st International Symposium on Social Identity and Loneliness: Community-based approaches to loneliness reduction. 2024年6月14日、ノッティンガムトレント大学
- ・ 高島 理沙、令和6年度昭和連合町内会地区地域ケア会議、「社会的孤立・孤独の予防と日本版メンズ・シェッド」、2024年6月25日、札幌市西区西野まちづくりセンター
- ・ 松尾 崇史、人吉市社会福祉協議会・人吉球磨成年後見センター第4回地域連携ネットワーク・市民後見人フォローアップ研修、「コミュニティーシェッド（メンズシェッド）の活動紹介」、2024年7月11日、熊本県球磨郡水上村石倉交流施設
- ・ 高島 理沙、令和6年度清田区福祉のまち推進センター活動交換会、「地域活動の可能性と魅力を再確認～地域の居場所づくりと担い手不足の解消のヒント～」、2024年8月19日、札幌市清田区清田区民センター
- ・ 高島 理沙、全国リハビリテーション学校協会 第37回教育研究大会・教員研修会、「ストーリーが開く扉 リハビリテーションと医療教育におけるナラティブの可能性」、オンライン、2024年8月31日
- ・ Risa Takashima, 国際共同シンポジウム「多様性と孤独・孤立：作業療法と作業科学による公正の追求」、Empowerment and Creating a Sense of Belonging: The Occupational Therapists' Journey Towards Justice、2024年11月4日、北海道大学オープンイノベーションハブ エンレイソウ

### 6-3. 論文発表

- (1) 査読付き（ 4 件）

●国内誌 ( 0 件)

●国際誌 ( 4 件)

- Virtual Avatar Communication Task eliciting Pseudo-Social Isolation And Detecting Social Isolation using Non-Verbal Signal Monitoring In Older Adults  
Ayumi Takemoto, Miyuki Iwamoto, Haruto Yaegashi, Shan Yun, Risa Takashima  
Frontiers in Psychology Volume 16 - 2025 2025年3月  
<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2025.1507178>
- Igarashi, T. (2025). Loneliness and socioemotional memory. *British Journal of Social Psychology*, 64(1), e12783. <https://doi.org/10.1111/bjso.12783>
- Toyoshima A. (2025). Role Identity, Loneliness, and Bereavement During the Pandemic in Japan: A Cross-Sectional Study. *Health Science Reports*, 8(2), e70185. <https://doi.org/10.1002/hsr2.70185>
- Online Social Identity Mapping (oSIM) in Japan  
Ayahito Ito, Toshiyuki Himichi, Hirotaka Imada, Risa Takashima, S. Alexander Haslam, Blake McMillan, Tasuku Igarashi  
*Japanese Psychological Research* (in press)

(2) 査読なし ( 0 件)

**6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)**

(1) 招待講演 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- 伊藤文人 (東北大学)、孤独・孤立の予防に基礎研究は貢献できるのか? 心理学・神経科学の可能性 日本心理学会第88回大会 公募シンポジウム「孤独・孤立の予防に基礎研究は貢献できるのか?」 2024年9月7日
- 高島理沙 (北海道大学)、佐藤剛記念講演「作業の文脈をデザインする—共創と参加型研究によるエンパワーメントと社会変革」、日本作業科学研究会第27回学術大会、埼玉、2024年9月8日

(2) 口頭発表 (国内会議 1 件、国際会議 3 件)

- 伊藤文人, 日道俊之, 今田大貴, 高島理沙, ハスラムアレックス, マクミランブレイク, 五十嵐祐 日本人におけるオンライン社会的アイデンティティマッピングの妥当性検証 第48回 日本神経心理学会学術集会 2024年9月6日
- Ayahito Ito, Toshiyuki Himichi, Hirotaka Imada, Risa Takashima, Alex Haslam, Blake McMillan, Tasuku Igarashi. Validity of online social identity mapping (oSIM) in Japan. *The 6th International Conference on Social Identity and Health* 2024年6月20日
- Risa Takashima, Takashi Matsuo, Rika Hirayama, Kazuko Saeki. Older Men Living in a Modernizing Rural Village: Cultural Insights into Loneliness and Occupational Being. *The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024*, Sapporo, 2024年11月6日
- Rika Hirayama, Mari Sakaue, Eric Asaba, Urša Bratun, Kim Walder, Risa

Takashima. The Experiences of Occupational Transition in the Retirement Process for “Company People”: A Focus on Isolation and Loneliness among Urban older Men in Japan. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024年11月7日

(3) ポスター発表 (国内会議 3 件、国際会議 1 件)

- ・五十嵐 祐・吉田 琢哉・平島 太郎 (2024). 孤独感はネットワーキング行動を促進するのか：確率的アクター志向モデルによる縦断的検討、日本心理学会第88回大会、熊本、2024年9月7日
- ・豊島 彩・楠見 孝 (2024). 孤独感が社会的脅威に対する選択的注意に及ぼす影響—孤立場面への注意からの解放の遅延効果の検証—, 日本パーソナリティ心理学会第33回大会 筑波 2024年10月6日
- ・Ryo Hirakawa, Risa Takashima. Masculinity, Loneliness, and Social Isolation: Their Impact on Occupational Participation Among Older Men. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024, Sapporo, 2024年11月7日
- ・坂上真理、堀田典、高島理沙. 作業的well-being—地域在住高齢者は作業的生活でどのようにwell-beingを経験しているのか—, 第58回日本作業療法学会、札幌、2024年11月9日

## 6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 ( 13 件)

- ・北海道新聞デジタル、2024年7月20日、孤立と孤独をぶっ飛ばせ 高齢男性の心地よい居場所「メンズ・シェッド」、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・産経新聞デジタル、2024年8月11日、リタイア男性が集う「小屋」開設 仲間づくりや趣味で交流 孤立化を防ぐ取り組み、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・秋田さきがけ、2024年8月12日、中高年男性集まれ！！、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・zakzak byタ刊フジ、2024年8月16日、札幌のリタイア男性が集う「小屋」で新たな挑戦 退職後は家にこもりがちな男性 集いの場で仲間をつくり孤立化予防、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・毎日新聞、2024年8月17日、仲間づくり孤立化防ごう、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・日本経済新聞、2024年8月19日、リタイア男性集う「小屋」札幌 仲間作って趣味楽しむ 孤立対策 地域に居場所、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・山陰中央新報デジタル、2024年8月22日、リタイア男性集う「小屋」札幌仲間づくり孤立化予防、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・沖縄タイムス社、2024年8月26日、リタイア男性集う「小屋」 仲間づくり孤立化予防、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・岩手日報、2024年8月29日、リタイア男性集う「小屋」、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・地域サロン情報誌「ちさろ」、2024年8月秋・冬号Vol.16、男たちの男たちによる男たちのための基地メンズ・シェッド、札幌CSポッケコタンの活動紹介

- ・北海道新聞、2024年11月7日、定年男性集って生き生き、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・北海道新聞、2024年11月8日、空き家改装みんなの基地、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・北海道新聞、2024年11月25日、折り込みタウン誌「ウォーク」\_平和地区に活動拠点誕生、札幌CSポッケコタンの活動紹介

(2) 受賞 ( 2 件)

- ・伊藤文人 令和6年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞
- ・坂上真理, 堀田典, 高島理沙 優秀演題賞 作業的well-being 一地域在住高齢者は作業的生活でどのようにwell-beingを経験しているのか— 第58回日本作業療法学会

(3) その他 ( 6 件)

- ・内閣府、令和6年度 地域における孤独・孤立対策に関するNPO等の取組モデル調査の事業に札幌CSポッケコタンが採択、2024年8月2日
- ・東京FM Interfm「Otona no Radio Alexandria」、2024年9月11日、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・HTB「イチオシ!!」、2024年10月3日、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・HTB「イチオシ!!」、2024年10月23日、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・NHK「ほっとニュース北海道」、2024年10月17日、札幌CSポッケコタンの活動紹介
- ・NHK「列島ニュース」、2024年10月29日、札幌CSポッケコタンの活動紹介

## 6-6. 知財出願

- (1) 国内出願 ( 0 件)
- (2) 海外出願 ( 0 件)